



N.S.ニュース速報A

NSDAP/AO : PO Box 6414

Lincoln NE 68506 USA

www.nsdapao.org

#1162

22.06.2025 (136)

戦争中のヒトラー 何が起こったのか？

A.V.シャーフェンベルク 著

パート9

第8章

西部の勝利

「哲学は、その時代と人民の最も勇敢でエネルギッシュな要素をその隊列に結集し、彼らを戦闘組織の強固な形態に組み込んで初めて、その思想を勝利に導くことができる」。

アドルフ・ヒトラー『我が闘争』第2巻第

5章

ヒトラー＝フォン・マンシュタイン西方攻勢が5月10日に開始されたとき、ドイツ国防軍はノルウェーで掃討作戦を展開していた。アルデンヌ地方を通過するドイツ軍の進撃は、特にヒトラーにとって魅力的だった。従

来の歴史家とは異なり、ヒトラーは外国の不動産を蓄積することに興味があったわけではなく、紛争が拡大するのを防ぐためにできるだけ早く紛争を封じ込め、終結させたかったのである。総統は、1940年の作戦開始の数カ月前から西部戦線のドイツ国防軍各司令官に発した戦争指令の中で、中立国への侵攻は許されないと何度も何度も強調した。総統は戦争遂行に関する最初の指令で、「オランダ、ベルギー、ルクセンブルク、スイスがわれわれに与えてくれた中立の保証は、細心の注意を払って守られなければならない」と述べている。第二次指令では、「中立領海を侵すことなくバルト海の入りを機雷掃海する」ことを命じた(38, 41)。彼は後に、ドイツ海軍に対して「すべての中立国の中立は完全に尊重されるべきである」

(「最高機密、将校のみ、海軍最高司令官、ベルリン、1939年8月4日」)と強調した。これらの指令は、終戦後(1964年)になって初めて公開された軍の極秘命令であった。

ヒトラーが戦闘の周辺にある中立国の主権を細心の注意を払って尊重していたのとは対照的に、連合軍司令官たちは、ゴート将軍率いるイギリス遠征軍とファガルド将軍率いるフランス第十六軍団を率いて、少なくとも1939年10月24日にはベルギーを占領する計画を立てていた。いわゆるダイル・プランは、ゴート軍がアントワープ前でベルギー軍との合流を計画していた川に由来する。この「個人的な極秘指示」(イネス、117)はベルギー軍最高司令部に伝えられ、司令官たちは自国の中立違反に心から賛同した。ベルギー国王レオポルド3世の領きを得て、フランス軍最高司令部を代表するジョルジュ将軍は11月14日、「暫定的なダイル・プランを明確な命令に変えた」(同書)。ベルギーの裏切りを知ったヒトラーは、英仏軍と合流する前にオランダを占領する準備をするよう、直ちに国防軍に命じた。これらの小国の民主主義当局は、連合軍の勝利によって利益を得ようと考えていた。具体的には、急増する人口を収容するために、北ドイツの犠牲の上に新たな領土を簡単に奪うことを望んでいた。

イングランドによるノルウェー占領の企てが頓挫したことで、オランダを経由する連合国のもう一つの脅威も、同様に徹底的に消し去らなければならなくなった。そのため、5月10日午前5時45分、英仏軍が低地諸国に進攻するわずか2時間前に、ドイツ空軍機がベルギーの飛行場を攻撃した。

ヒトラーの攻勢にとって最大の障害となったのは、ベルギーのエベン・エマール要塞であった。軍事界では「難攻不落」とされ、リエージュ防衛

の要であるだけでなく、西部作戦全体の要でもあった。その存在そのものが、ドイツ軍、連合軍を問わず、事実上すべての将兵に、この要塞が最も手強い攻勢を破るか、泥沼化させるだろうと確信させていた。エベン・エマールの指揮する地下の位置は、砦を迂回することのできない地上軍には難攻不落であり、その掩蔽壕は最大の航空爆弾や重砲の砲弾さえも絶対に通さなかった。砦は、ムーズ川とアルベール運河が交差するヒトラー攻勢の戦略的要衝を完全に支配していた。この運河の閘門（こうもん）は、要塞の監視員によって管理されていた。このベルギーの要塞の存在そのものが、ドイツ参謀本部の戦略家たちによって、フォン・マンシュタインの計画に反対する根拠として挙げられていた。確かに、通常兵力はエベン・エマールを通過することはできなかった。

総統はまたしても、陸軍最高司令部の上官たちから革新的なアイデアで陰に追いやられていた人物を探し出した。クルト・スチューデント将軍は、兵士が人知れずグライダーで着陸することで、驚異的な防衛力を最小限の犠牲で奇襲できると考えていた。ヒトラーはスチューデントと協議し、夜明けのエベン・エマールへのグライダー攻撃の詳細を練った。この攻撃計画は非常に重要であったため、総統は、この砦の占領まで西方攻勢全体を延期した。

高度7,500フィートで、39機のDFS 230を曳航した比類なきJu 52は、木製の翼を持つ爆雷を切り離し、ドイツ国境で引き返した。その結果、グライダーは重装備の落下傘兵と爆薬の専門家を8機ずつ乗せ、エベン・エマールを含むムーズ川とアルバート運河沿いの橋に完全な沈黙のうちに着陸することができた。着陸は完璧で、防衛側にはまったく気づかれなかった。完全な奇襲を受けながらも、彼らは獰猛かつ巧みに反撃した。しかし、無敵の砦の屋根の上でドイツ兵と対峙したショックから立ち直るまでに、空挺部隊は2門の120ミリ砲と9門の75ミリ砲、つまり砦の天辺の大砲をすべて破壊してしまった。24時間以内に、700人の精鋭兵士がいた「難攻不落」のはずの砦は70人のグライダー部隊に陥落し、6人の死者と20人の負傷者を出した。この世界最強の砦の陥落によって残された連合軍防衛の巨大な隙間から、ドイツ国防軍の攻勢がベルギーに押し寄せた。

一方、他のグライダー部隊はヴェルドヴェーゼルトとヴローエンハーフェンの橋を素早く占領し、ドイツ軍はこれを越えて突入した。ヒトラー、スチューデント将軍、そして彼の落下傘部隊は、前例のない軍事的奇跡を成し遂げた。この作戦全体の中で最も重要な唯一の行動であり、戦

史上最も偉大でユニークな勝利のひとつであった。*The Marshall Cavendish Illustrated Encyclopedia of World War Two*（マーシャル・キャベンディッシュ 第二次世界大戦図解百科事典）』（141ページ、第1巻）の言葉を借りれば、「アドルフ・ヒトラーの想像力豊かな才能は考慮されていなかった。

わずか1週間で、英仏軍はベルギーから追い出された。エバン・エマエルの予期せぬ降伏に完全に油断した連合軍は、不死身と思われた別の要塞（マジノ線）の陰に隠れてよろめいた。ドイツ参謀本部を支配していた第一次世界大戦と同じメンタリティが、フランスの戦略を化石化させたのだ。しかし、総統は彼らの時代遅れの慣例を超えたところに目を向けた。彼がフォン・マンシュタインと練った計画によれば、ドイツ空軍は敵機の空を掃討すると同時に連合軍の地上部隊を叩き、それらは同時にパンツァーに蹂躪され、機動砲兵によって爆破され、歩兵によって磨き上げられた。国家社会主義者の協力精神は、これら戦闘のさまざまな要素を見事に調整し、迅速で、常に前進し、数で勝る敵のバランスを崩さない電撃戦を継続させた。

フランス軍やイギリス軍が立ち向かおうとする先々で打撃が与えられ、ドイツ軍は次の目標へと急ぎ、敵に対応する暇はおろか、息をつく暇も与えなかった。こうした戦術の速さと残忍さは、連合軍をすぐに狼狽させた。攻勢開始からわずか10日後の5月20日までに、フランスとイギリスの地上部隊は二分された。潮目が変わったのだ。彼らの名誉のために言っておくと、戦況が不利になり始めたとき、彼らは、カンブレイまで前進して補給の限界に達していた第7パンツァー師団に対して、即席の強力な反攻作戦を展開し、失われた主導権を取り戻そうと勇敢に試みた。連合軍の指揮官たちは、パンツァー師団の不安定な立場を理解し、機転を利かせて英仏の新戦車大隊を2個ずつ投入、弾薬の乏しいドイツ軍を圧倒し、全滅の危機に陥れた。アラス近郊では、フランスのシャルB戦車が至近距離でドイツ軍の装甲を驚かせ、ドイツ国防軍唯一の重戦車であるパンツァーマークIVの3両を至近距離で撃破した。

後に北アフリカでその名を馳せることになるエルヴィン・ロンメル将軍が第7パンツァーを率いていなければ、連合軍の一撃は成功していたかもしれない。ロンメルは模擬撤退を行った。フランス軍が嬉々として後を追うと、ロンメルは突然、装甲を振り回して彼らを血まみれにし、前進を止めた。隊列のひとつが20両のフランス重戦車に村で足止めされたとき、彼

は敵の後方を奇襲するために1両のIV号戦車を命じた。IV号戦車の乗員は至近距離から75ミリ砲を乱射して敵に突進し、約20分で14両の大型シャルBを撃破、残りを降伏させた。連合軍がこれほど壮大な作戦を達成したのは、この作戦期間中一度もなかった。ロンメルは1両のパンツァーが5両の敵と対峙していたにもかかわらず、シュトゥーカの急降下爆撃機が到着するまでの十分な時間、連合軍と交戦し、戦場にあったフランスとイギリスの戦車をことごとく撃破した。

翌5月21日、ドイツ軍の攻勢は、イギリスからの援助を断ち切るため、ブローニュとカレーの海峡港に向かって北上した。その重要性を理解したイギリス空軍の兵士たちは、激しい砲撃と空爆の中、5日間にわたる必死の防御を行った。これらの重要な港湾都市が陥落したことで、連合軍はイギリス軍とフランス第一軍が北から、フランス第七軍と第十軍が南から攻撃し、その間にドイツ軍の装甲の大部分を挟むという、数的にも圧倒的な反攻を開始した。その間に、ドイツ軍の装甲の大部分があった。さらに、空軍のスピットファイアとハリケーンがイギリスの基地から飛来し、フランスのデウォワティン、ブロッホ、モラン・ソルニエを援護した。メッサーシュミットが上空で彼らと格闘している間に、シュトゥーカの急降下爆撃機が英仏の反撃を打ち砕いた。英仏の退却は再開され、今度はパリに向かって真っ逆さまに後退した。

しかし、連合軍の大義はまだ失われてはいなかった。数多くのフランス軍が軍需品と補給物資をすべて失ったまま無傷であったのに対し、パンツァーの戦力は、2週間にわたる絶え間ない激走と戦闘の末、30%にまで低下していた。全連合軍を指揮するマキシム・ヴァイガンド将軍は、カンブレイ奪還のための総攻撃を開始しようとしていた。しかし、この作戦を成功させるためには、イギリスの地上部隊、特に戦車、そして最も重要なこととして空軍の支援が不可欠であった。ワイガンドの攻撃は成功を予感させるもので、事実すでに進行中であった。英空軍の責任者であるゴート卿は、新首相ウィンストン・S・チャーチルから個人的な命令を受け、フランスとベルギーの同盟国に通知することなく、戦地にいる彼らを見捨てたのである。ヴァイガン攻勢は崩壊し、フランスの運命は決まった。チャーチルは大声でレオポルド国王を「裏切り者」と非難したが、ベルギーが降伏する5日前に国王に通告していたにもかかわらずである。

6月5日、ドイツ国防軍は南部に残存する連合軍に対して作戦を開始した。その翌日、ドイツ軍はソナム下流を突破してエスヌ川に到達し、まも

なくフランス第10軍（ドイツ軍は休戦後の絶望的な勇気に対して特別な賛辞を贈った）の断固とした兵士たちを撃退した。彼らは、ダンケルク行きの仲間から切り離され、同じように避難できることを期待してサン・ヴァレリーへ逃れた。彼らはそれほど幸運ではなく、6月12日に降伏した。この悲惨な出来事の数日前、ゴート卿の不運な兵士たちは、12万人のフランス人とベルギー人とともに、22万人がダンケルクの海岸に押し寄せた。戦意喪失した連合軍が砂浜にしゃがみこんでいるのが見える崖まで、パンツァーは駆け上がった。

ドイツ軍司令官たちは、降伏するか全滅するかという拒否できない最後通牒を突きつけようとしていた。国防軍の兵士は皆、信じられない思いで茫然とした。4年後、ベルギーのSSリーダー、レオン・デグレルに説明したように、ヒトラーはダンケルクでイギリス軍を解放した：「降伏か全滅を強要すれば、交渉の余地はなかっただろう。イギリス人を帰国させることで、イギリス当局も国民自身も、彼のジェスチャーが戦闘の終結と和解の始まりに向けた誠実な動きであることを正しく理解することができた。

その代わり、チャーチルとその宣伝担当者たちは、歴史的にみてもユニークな寛大さを持っていたヒトラーの驚くべき申し出を裏返しにした。ヒトラーの和平への試みは、退却の最中であつたにもかかわらず、イギリス兵を打ち砕くことができなかつたためにもたらされた敗北として描かれた。ドイツ軍が挫折し、打ちのめされたように描かれたからだ。騙されたイギリス国民は、自分たちの息子、夫、父親、兄弟が、海峡を渡るヨットのその場しのぎの船団によってではなく、ユダヤ人が引き起こした戦争でこれ以上アーリア人の血を流すことを総統が拒否したことによって救われたことを知ることは許されなかつた。

いわゆる「ダンケルクの奇跡」は、すべてアドルフ・ヒトラーの仕業だった。彼の行動は高邁であつたかもしれないが、ロンドンの当局にとってはまったくの無駄であつた。1940年に彼が助けた50万人以上の敵兵は、チャーチルらの巧みな宣伝のおかげで、彼が彼らのためにしたことを理解しなかつた。彼は、自分の善意の使者として彼らを帰国させようとするよりも、最後の一人まで虐殺した方がよかつたのだ。

いずれにせよ、このような全滅は必要なかつただろう。ダンケルクの浜辺で直面したまったく絶望的な状況で、名誉ある降伏の機会が与えられれば、ゴート卿と彼のB.E.F.は、第51ハイランド師団の同志たちがサン・ヴァレリーで同じような状況に陥ったときと同じように、武器を捨てざる

を得なかっただろう。イギリスを代表する軍事史家バジル・リデル・ハート卿は、ダンケルクについて「これほど防げた大惨事はなかった」と述べている（Walsh, 42）。チャーチルは公の場では否定し、ダンケルクからの不名誉な撤退をイギリスの勝利にねじ曲げたが、内心では「とてつもない軍事的大惨事」（ibid, 43）と表現した。帝国参謀総長のアイアンサイド將軍は、アンソニー・イーデンに「これは大英帝国の終焉だ」と打ち明けた（同書）。

最後のトミーが帰国してから2週間も経たないうちに、ドイツ軍がパリに進駐した。ワルシャワで起こったように、帝国への宣戦布告の責任者である政治家たちは、敗戦で漂流する自国民を残して逃げ去った。由緒ある第一次世界大戦の英雄であり將軍であったフィリップ・ペタンが新政府を樹立し、6月25日に休戦協定を受け入れた。ペタンは賢明な選択だった。総統は彼を尊敬していたからだ。それゆえ降伏条件は甘く、ヒトラーがフランス艦隊に寛大な対応をしたことで証明された。敵対的な『タイムライフ』誌の著者（『ドイツ空軍』44ページ）ですら認めざるを得なかったように、「この2つの作戦--スカンジナビアと、その1ヵ月後の西ヨーロッパの平原での作戦--は、近代で最も輝かしい軍事作戦のひとつであった」。もしそうなら、その成功は、アドルフ・ヒトラーと彼が作り上げた国家社会主義者の想像力豊かな天才に圧倒的に負うところが多い。多勢に無勢、技術的にもしばしば劣勢に立たされながら、これほど短期間にこれほど強大な敵を徹底的に打ち負かした国家は、歴史上他にない。それに匹敵するようなことは、かつて起こったことがなかった。

西方作戦の勝利は、総統の大胆さと才気によってもたらされたが、それは主に彼の親衛隊の兵士たちを通して表現された。しかし、ライプシュタインダルト・アドルフ・ヒトラー（アドルフ・ヒトラー親衛隊）の部隊は、爆破される前に戦略的なオランダ運河を占領し、電撃作戦を可能にした。彼らはロッテルダムを3日で占領し、フランス領内を24時間で120マイル前進して攻勢全体の先頭に立った。電光石火の進撃でソナムを占領すると、SS トーテンコップ連隊はパリへの道を切り開いた。アーリア人の若い精神が、フランスの戦場でユダヤ民主主義の古い世界を打ち砕いたのである。連合国---そのすべての兵士と工場労働者たち---は、「ポーランドを救う」「中立国を守る」「フランスでナチスの世界征服を阻止する」などとは何の関係もないユダヤ人の思惑の哀れなカモになっていた。これらは、異邦人の消費のために感情的に仕組まれた、見え透いたシボレーズであった。

ヒトラーの成功は、実際には、人種的自殺を意図するユダヤ人まみれの国家の欺瞞に満ちた手先やイデオロギー的小人に対する、国家社会主義者の組織と優れた戦闘能力の勝利であった。西方作戦は、人種を意識したアーリア人だけの戦闘員団が、インド、セネガル、インドネシアからの有色人種植民地部隊を擁するイギリス、フランス、オランダのような、数的優位に立つ人種混成の敵を打ち負かすことができることを実証した。



NSDAP/AOは世界最大です 国家社会主義プロパガンダサプライヤー！

多くの言語での印刷物およびオンライン定期刊行物

多くの言語の何百冊もの本

多くの言語の何百ものウェブサイト



BOOKS - Translated from the Third Reich Originals!
www.third-reich-books.com

